

# VB経営 虎の巻

先日、「社長交代」について講演した。私はこれまで3度、社長職を後継者にバトンタッチしてきているが、いずれもうまくいったと自負している。講演後、出席者から「後継者選出の決め手は何だったか」と問われた。私の答えはシンプルだ。周囲の納得感。これに尽きる。

## 後継者へのバトンタッチ

先日は2・47%と再び過去最低を記録したという。

社長交代のタイミングは難しい。特に先行きが不安定だと安心してバトンタッチできないという経営者も多いだろう。しかし、社長交代は現職社長の重要な責務の一つ。うまくいかない

## 周囲の納得感決め手に

と企業が傾く。自分の年齢を冷静に見つめ、戦略的に実行すべきだ。

非オーナー系企業の場合



インディゴブルー社長 柴田 励司氏

1985年上智大文卒。マニックス2008年カルチュア・コンソーシアム・ヒューマン・リソース・ビニエンス・クラブ(CCC)・コンサルティング(現マーサ)の最高執行責任者(COO)・ジャパ、社長などを経て、に就任。10年6月から現職。

納得感が生まれるのは、仕上げの肝になる。

その候補者の人間性に帰す。社外から社長を招くときるところが大だ。あの人も、この納得感づくりは欠かさない。他社での実績も一緒に働きたいと周囲の多

良いが、それだけでは肌感。周囲にもその認識がある。しかし、これはまず顧問などの肩書で社内の仕事に触れてもらい、「この人であれば」という気持ちを抱いてもらう必要がある。バトンを考える社長は、その場づくりを自ら行すべきだ。ヘッドハントできたらおしまいではない。古くからの幹部を事実に関係なく要職から外したり、腫れ物に触るようにつまみ分けたり、「見返してやる」と力を入れ過ぎて見込みの薄い新事業を立ち上げようとしてはいけません。創業社長はバトンタッチを継ぐことが選択肢にならず、学生時代から家業を継ぐことが選肢にならず、と心して臨んでほしい。